

第6回 公開対談「本願寺茶房」 「儀礼と芸能 一本願寺と能一」（要約）

対談 亭主：天岸淨圓氏 客人：藤田隆則氏

本願寺には南能舞台・北能舞台と2つの能舞台があり、今でも毎年5月の降誕会の時期には南舞台において祝賀能が催される。南能舞台は現存する日本最大の能舞台であり、北能舞台は建築年数が明確なものとしては日本最古のものである。西本願寺と能に、このような深い縁があることから今回の茶房が実現した。

芸能の歴史は100年ともたないことが多いが、能は600年程の歴史を有している。藤田氏はその理由として、観て楽しむだけでなく、演じて楽しむものでもあったからだと述べる。対して天岸氏は、当時の民衆における「酒の肴」の概念がつまみではなく舞であったことについて触れ、舞の体験性の浸透具合を指摘する。ここで「社交手段としての能」が話題となる。室町期に幕府をパトロンとした能は、大名同士の社交手段となった。本願寺においても、能の興行される謡初や松囃子といった行事が政治的交渉の場となっており、交渉をスムーズに進める上で能が大きな助けになっていたことを窺うことができる。また、能は一部を再現して舞うものとして楽しまれており、良いセリフや言葉も多く、社交手段に適していたと見ることができる。そこで天岸氏は、話題の共有性について言及する。相手にこちらの話聞いてもらおうとする場合、お互いに共有できる話題があることは、話の通りを良くする上で重要となると指摘する。

次に、話題は「本願寺と能」へと移る。藤田氏は本願寺坊官、下間少進（1551～1616）を演目ごとに演技の標準規定を整理した人物としてその功績を讃える。加えて、演者は北向き、観客は南向きが能の基本的原則であるにも拘わらず、北舞台は方角が逆であるとして、北舞台への関心を示す。自身の二つの見解として、天子やパトロンといった素人が舞うための舞台、あるいは神に向かって演技をする修行の場ではないかと述べる。

続いて、「能の変容」が話題となる。藤田氏は、江戸期以前をパトロンが演じ楽しむ時代、江戸期以降を修行の時代とする見解を示す。また、世の中のテンポの変化も原因ではないかと天岸氏は述べる。藤田氏は、楽しむものから修行へ、儀式のための楽として民衆のものから武家のものへと変化したのではないかとの見解を示す。楽しむよりは責任感を持って真剣におこなうべきものとなり、現在のような緊張した雰囲気へと変化したと考えられると述べる。

最後に、藤田氏は、能という芸能が維持されてきた背景として、神聖さ・儀礼性・退屈性の3つをあげる。退屈性とは、大多数の退屈に対しての少数の熱中であり、退屈性より儀礼性は生じ、退屈性は儀礼性へと転換されるという。そうした転換の、一連の流れが観客を演目の世界にぐっと引き込むのであり、演者に求められる力量ははかりしれないと藤田氏は述べる。天岸氏は、宗教儀礼に通じるものがそこにあるとの見解を示す。世界にぐっと引き込むために演出するという芸能性。退屈性から儀礼性への転換、そこに見える観客側における感動の共有、そのために必要な技術的芸能性。これから宗教儀礼を考えていく上では、そうした技術面も大事になるのではないかと指摘する。